

68年後の村上春樹と東アジア

加藤典洋

68 Years After: Novelist Murakami Haruki and the New East Asia

Norihiro KATO

Abstract

East Asia has entered a challenging phase. About three decades ago, the only so-called “developed” country in the region was Japan, with the rest of East Asia lagging behind. In 2013, the situation is very different: it is no longer Japan but China that maintains the second largest gross domestic product (GDP), just behind the US. Korea has also undergone significant change and is now a developed country that has eroded market share from Japan. These countries now have a relatively equal status economically and together have established an economic sphere independent from the Euro-American markets. They are sustainable in, and now indispensable to, the world economy: the nominal GDP of China, Korea, and Japan totals about \$16 trillion, rivaling that of the US and the EU, each of which totals about \$17 trillion. For the first time in the 68 years since World War II, East Asia has reached a “converged” condition.

So why do international conflicts emerge in this region? Some of the causes reside precisely in this convergence. In addition to the sudden power shift stemming from China’s emergence as an economic force, each country’s domestic problems also have produced international tension in the region. The Senkaku/Diaoyu and Takeshima/Dokdo conflicts, in particular, gave rise to xenophobia and anti-foreign outbursts. Interestingly, in spite of these issues, the region also has spawned paradoxical social trends and subcultures, such as the *Otaku* phenomenon, the “Korean boom” and an affinity for high culture, represented specifically in the work of Haruki Murakami.

What is the significance of Murakami as a common East Asian affinity of “high-culture-ness”? What clues towards resolving the difficult East Asian conditions are embedded in this affinity? When Murakami made an appeal against the Senkaku/Diaoyu conflict in 2012, Chinese novelist Yan Lianke responded promptly in the article “Words to Soothe the Asia’s Tensions”. Beginning with this dialogue, and through a discussion of Murakami’s writing on China, this paper considers Murakami’s position on the relationship between China and Japan.

0 二つのこと

問いはこうです。東アジアという文化圏があるとして、そこで村上春樹が果たす意味にはどのような可能性があるのか。

それほど時間を与えられているわけではないので、簡単に二つのことだけを述べてみます。

一つは、東アジアについて。東アジア圏、東アジア世界というものが、いま、近代以来、あるいは有

史以来、かつてなかった新しい段階にいたろうとしています。簡単にいうと、日本、中国、韓国、台湾、これらの国が、一線に横並びになっている。そして、それが、世界有数の経済圏を形成するにいたっています。

もう一つは、そういうなかで、村上春樹の東アジアに向けてなされた発言、また東アジアを視野に入れた作品から、いま私なら私が、どういうヒントを受けとるか、私たちが、何を学ぶことができるか。

この二つをできるだけ最短距離で述べてみましょう。

1 村上春樹

——戦後・IT時代・東アジアの緊張

上のタイトルの「68年後」というのは、今年(2013年)が、日本の戦後の68年目にあたるという意味です。このタイトルは、三つのことを念頭に置いています。第一に、村上春樹が1949年生まれで、その4年前の1945年の日本の敗戦、また戦後のはじまりと、固く結びついていること、第二に、しかしそれからもうだいぶ時間が経ってしまっただけでその「戦後とのつながり」自体がいったん切断され、IT時代ともいべきところにわれわれはいること、第三に、にもかかわらず、戦後の枠組みをもつ問題群は、この東アジアでは、いまだ解決されておらず、そこから、先の二つの要素を重ね合わせるように、新しい政治的、経済的な緊張をはらむかたちで、新しい東アジア世界というものがいま顔を出そうとしていること。

そしてその前提をなすのが東アジアは現在、第二次世界大戦の「歴史の枠組み」への顧慮なしには存在しないだろう、という認識です。

さて、東アジア文化圏という言葉ですが、これは、去年9月、尖閣列島国有化を機に激発した中国での反日暴動と日中対立の際に、村上が行った「魂の行き来する道筋」という発言の中に出てきます。そういうものが想定可能である。村上は、そうした新しい状況のもとで、相対立するいくつかの国、日本、韓国、台湾、中国のなかで、広範な特に若い人々にそれぞれに支持される、ほとんどただ一人の例外的な主題、存在になっています。まさしく、対立と緊張をいまも深める日本と中国と韓国、その三つの国で圧倒的に作品が読まれ、多くの人々に支持され、その発言が偏見なしに受けとめられる村上は、その意味では、東アジア文化圏という世界を体現する、現在、代表的な存在というべきなのかもしれません。

その支持のされ方は、その国自体のなかで、多層的でありうるし、また、国ごとにも、それぞれに違っているでしょう。しかし、そのような対立を抱えた地域で、一人の小説家が、一つの「合い鍵」あるいは「マスター・キー」、つまりフランス語でいう *passé-partout* ——どこにでも出没できる——の存在になっていること。そのことの意味は、大きいとい

わなければなりません。

そのことを手がかりに、村上春樹について、また東アジア世界について、どういう新しい視角が生まれてくるのか、ということをごここでは簡単に述べてみます。

2 マスター・キーと小説

いま東アジア世界における村上春樹の存在の意味を「合い鍵」、「マスター・キー」といいましたが、その意味は、彼の小説が単なるこの世界での「共通項」となっているという意味だけではありません。ここに「小説」という媒体の特質がある。つまり、村上春樹がこれらの国で共通に受け入れられている意味は、たとえばオタク文化や「かわいい」文化が、これらの地域全体を文化現象的に席卷しているということとは、本質的に異なる意味をもっているということです。

その意味で、「マスタ・キー」のフランス語である *passé-partout* は、私に、ジュール・ベルヌが一八七二年に書いた『八十日間世界一周』のことを思い出させます。というのも、この小説は、インドに東西を横断する鉄道が開通し、イギリスがイギリスの植民地、旧植民地、また覇権を有する地域だけを飛び石伝いに通過することで、世界を一周することができるようになった——つまり英国の経済産業的な世界制覇が実現した——ときに、そのことに真っ先に気づいたフランスの小説家ジュール・ベルヌが構想した興味深い作品なのですが、そこにこの言葉が、意味深い仕方に出てくるからです。

ご存じのようにこの小説では、地球という球体の制覇という無限性と、地球の自転という有限性の特質が、最後の一日違いの日数計算のトリックを巧みに作っています。また、その対置は、イギリス人の富豪を主人公に、如才なく機転のきくフランス人をその召使いたる執事に配した一対のコンビのうちにも生きています。富豪の前身はドン・キホーテ、召使いの前身はサンチョ・パンザです。ところでその執事の名前が、*Passe-partout* (パス・パルトゥ) という。これは、字義的にいうと、どこにもいける、どこでも通用する、という意味のフランス語ですが、つまり、富豪フォッグ氏が、召使いの *passé-partout* に導かれるようにして、世界を一周する。その話が、同時に、いかにもイギリス的で気むずかしい非共約的なマスターと、異なる世界を自由自在

に流通する共約的なバトラーが、一対で世界を一周する、そんな物語に重なっているのです。

ところで、小説もまた、共約的なものと非共約的なものとの重層的な一対ではないでしょうか。この点、村上の小説が東アジアのどこでも通用するというこの意味はこの小説の主人公たちの一対とよく似ているのではないのでしょうか。そしてそこに村上春樹の「小説」が共通項であることの、オタク文化が共通項であることとの違いが、あるのではないのでしょうか。村上春樹が東アジアのマスター・キーだということの中には、「非共約的なもの」がある。その共通性はじつは重層的で、深いのだ、ということになるのではないかと思います。

3 尖閣諸島対立と村上発言、閻発言

さて、そのような存在として、去年（二〇一二年）の九月、日本政府による尖閣諸島の国有化から生まれた日中両国の緊張のなかで、村上春樹が目すべき発言を行いました。彼は、いま東アジア文化圏ともいべきものが生れようとしていること、その背後にこの二十年来の中国、韓国、台湾の「めざましい経済的発展」があることを指摘し、このことによつていよいよ確かなものになってきた文化的交流は、われわれの相互理解と信頼を深める「魂が行き来する道筋」として大事な意味をもつだろうこと、ナショナリズムは一夜の安酒の酔いに似ているが、その対極にこの深い「魂の行き来」の道筋があると語り、この「魂の行き来する道筋」をこれからも「何があろうと維持し続けなければならない」、と述べたのです。

ところで、興味深かったのは、この村上の発言に、中国の先進的な小説家、閻連科（イェンリエンクー）が呼応したことでした。彼は日本のメディアに寄稿し、こう述べました。村上の発言に自分は自分の動きの鈍さを「恥ずかしく思う」。このような憎悪と憤激の激発に対してわれわれは彼がいうごとく、理性を行使し、「文化と文学」という「人類存在の最も深い部分の根」を守らなければならない。それが「中日及び東アジアの人々が互いに愛し合うための重要な血管」なのだ。

その閻（イェン）さんが、今日、このシンポジウムに参加して下さり、さきほど、われわれは彼のトークを聞いたところです。

さて、私がこのやりとり、また、閻さんの話から

感じるのは、こういうことです。

閻連科発言を掲げた昨年の『アエラ』の記事は、このとき、興味深い中国メディアの特派員の観察と一緒に載せました。これまで、右翼的な作家以外には、村上以前に、「領土問題について率直な意見を明らかにする」日本の「著名作家」は「ほとんどいなかった」というのです。閻さんの寄稿は、最初に大江健三郎の領土問題への発言に対する尊崇の念も記されていますから、大江健三郎は発言していたのだと思います。でも、総じていえば、その印象は間違っていない。これらの問題があまりに愚劣なものであるだけに、日本の多くのまっとうな作家の大半が、これを批判的に見ていたことはいまでもないと、これを外から見える形で、改めて発言することは、余りなかったのです。

しかし、なぜそうなのか。私自身について考えても、なぜ発言しなかったか、と反省してみると、あまりに愚劣で政府の愚行ぶりがあからさまなときには、かえって発言しづらい。一般の新聞その他でいわれている以上のことはいえないと感じるばあい、特に発言を求められなければ、自分からは発言しない、と考えてきたことに気づきます。目新しいことがいえないのなら、他人と同じ紋切り型の反対を口にしても仕方がないということです。しかし、もうそれではダメなのではないか。新鮮なことではなくとも、これは大事だということ、つまり目新しい、大事なことを、人々の耳に届くように語ることが、いまは必要なのではないか。つまり目新しいことを、自分の言葉で語ること、これこそがいま大切かもしれない。私はいま、そう思っています。

私の理解のなかでは、こういう新しい覚悟に立って、今回のシンポジウムは企画されています。少なくとも、閻連科さんの記事を読んだ李成市さんから、こういうことをやらないか、と昨年、提案を受け、これを引きうけたのには、そんな思いがあったからでした。その時に比べ、もう少し、今年は、その気持が深まっています。それが私の中で確信的なものとなっています。新鮮なことをいえずとも、ものごとを、人に対して訴えること、そのことが大事なのかもしれない。そう思っています、ここに立っているのです。

以下、その「さほど目新しいくないこと」を二、三、東アジア世界と、村上春樹の東アジア観にふれつ

つ、述べてみます。

4 東アジア世界の新しい姿(1) ——日本、中国、韓国、台湾の横並び性

今回のシンポジウムに村上春樹ともう一つ、掲げられている主題が、「東アジア文化圏」というもので、これは、先の文章で、村上発言に出てきた言葉です。彼はそこで、ここ二〇年来、知的財産を扱う共通ルールなども確立され、文化交流が「豊かな、安定したマーケット」として着実に成熟をとげてきたという彼自身の体験、見聞をもとに、東アジアに「固有の文化圏」が形成されつつあるという観測を示しています。しかし私は、ここに成立しようとしているものを、もう少し大がかりなもの、東アジアの文化圏だけではなく、政治圏、社会圏でもあるようなもの、——「東アジア世界の新しい姿」として考えたいと思います。とりわけその基礎条件を経済圏の成立ないし浮上に見てみると、新しい東アジア世界ともいふべきものが現れてきていることがわかります。

それがどう「新しい」かは、韓国、中国、台湾、香港、日本といった東アジアの国々——ここに北朝鮮も加えられるべきでしょうが——の関係を、20年よりももう少し長く取って、村上が登場した一九八〇年前後と比べてみると、よりはっきりするでしょう。

ひとつのグラフを用意しました。(次頁、図1) 東アジア諸国のうち、日本、韓国、中国、台湾の名目GDPの1980年から2013年までの推移がアメリカ、ドイツを加えた形で示されています。

このうち、一九八〇年の東アジア三国の名目GDPは、日本が1兆0870億ドル、韓国が640億ドル、中国、3034億ドル、台湾422億ドルで、一方、アメリカは2兆8625億ドル、ドイツが8261億ドルでした。

それが二〇一三年には、日本5兆72億ドル、韓国1兆1975億ドル、中国8兆9393億ドル、台湾422億ドル、アメリカ16兆7243億ドル、ドイツ3兆5932億ドルとなります。

それぞれ、日本が4.6倍、アメリカが5.8倍、ドイツが4.4倍の上昇であるのに対し、韓国は18.7倍、中国は29.5倍の経済成長で、いかにこの二国が、この33年間で、急激な経済成長をとげてきたかがわかります。

その結果、一九八〇年には、日本の名目GDPが、韓国の約17倍、中国の3.59倍で、東アジア圏で突出していたのに対し、二〇一三年には、中国が日本を追い抜き、日本の1.79倍、韓国の7.46倍となっているのです。

もう少し詳しくいうと、一九七九年に、OECDが「新興工業国の挑戦」(The Impact of the Newly Industrialising Countries)という報告書を出して、NICs、東アジアの韓国、台湾、香港、シンガポールなどを含むいくつかの地域の国々の新しい経済成長ぶりを取りあげます。そのときには日本が突出していた。韓国は新興工業化の過程に入ったところで、中国はそれ以前の発展途上段階にとどまっていた。

しかし、その後、NIEsの輸出志向工業化をならってASEAN諸国が経済成長に向けての離陸を果たすと、一九九三年、今度は世界銀行のレポート「東アジアの奇跡——経済成長と政府の役割」(The East Asian Miracle: Economic Growth and Public Policy)が現れます。そして、これらに刺激を受け、一九八九年の天安門事件、一九九二年の鄧小平の「南巡講話」へた中国がはっきりと「改革・開放政策」に舵を切り、「社会主義市場経済」路線を選ぶと、毎年10%超の成長率を示すようになり、いまや韓中二国は少なくともGDPの規模で世界の先進諸国の域に入るようになるのです。

二〇一〇年に日本を追い抜いた後、中国はいまでは日本に1.5倍以上の差をつけ、韓国も驚異的な経済成長を実現しています。そしてどうなったか。三者の関係は、以前はトラックでの競走競技でいえば、周回違いだったのですが、いまや同じトラックでのデッドヒートともいふべき「横並び」の競走状態を作っている。先端技術などを視野に入れば、むしろ台湾もここに入ってくるでしょう。金融を入れれば香港も入ってきます。つまり、これに一人あたりの名目GDPということも勘案すれば、ほぼ東アジアの諸国に、——北朝鮮を例外として——横並びの状態が実現しつつある。一人取り残された北朝鮮の、異様さというべきものが逆に浮かびあがってきますが、じつはこれは、近代開始以来、ということとは有史以来、東アジアにおいてははじめての達成なのです。

これに政治状況を重ねてみれば、この「横並び」性がより説得力あるものとして浮かびあがってくる

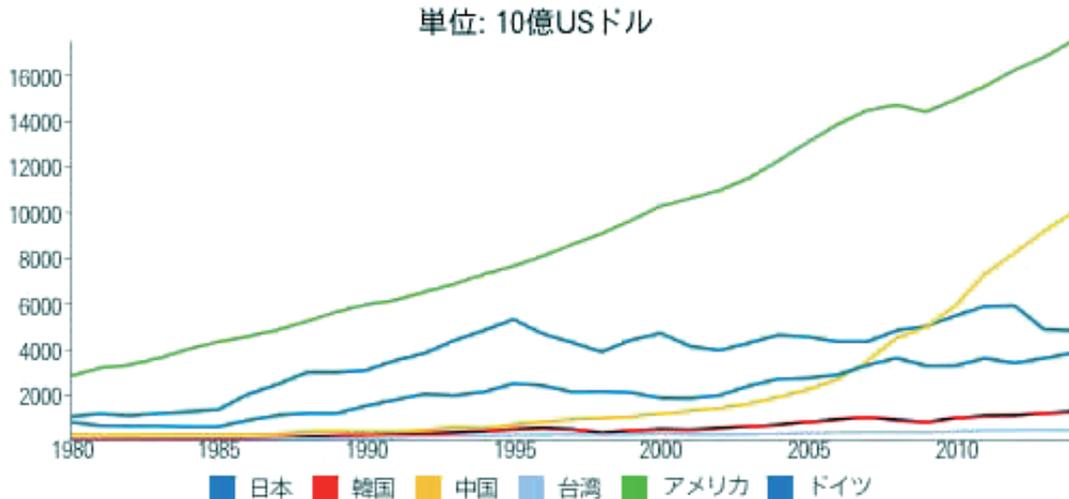


図1 名目 GDP (US ドル) の推移 (1980~2013 年) (日本, アメリカ, 韓国, 中国, 台湾, ドイツ)

http://ecodb.net/exec/trans_country.php?type=WEO&d=NGDPD&s=1980&e=2014&c1=JP&c2=US&c3=KR&c4=CN&c5=TW&c6=DE (「世界経済のネタ帳」により作成)

でしょう。

つまり、戦前の体制からどのように民主主義化が行われたかという一点に絞って三国を比較してみると、日本は戦後、いち早く四五年に民主主義化するが、これは米国主導、他律的なもので、六〇年の安保闘争をへて、自主的な民主改革はその後も果たされないまま現在にいたっています。韓国は、八〇年の光州事件以後、まがりなりにも全斗煥、金大中、盧泰愚、と三代の大統領の施政を経るなかで、自前の民主化を実現してきています。中国は、八九年の天安門事件の弾圧をへて、今なお大きな問題をはらんでいます。それでも四九年の共産革命以来、自前での文化大革命、近代化の試練をくぐって、自力による問題解決の道半ばにある。台湾も、自力での民主化を実現し、また堅固な経済成長をも実現してきています。

地勢学的に冷戦構造下で日本は他のアジア諸国の苦境をまぬかれ、政治的に恵まれた優位性を享受したのですが、反面、自力での民主化でいえば、韓国、台湾がそれを実現し、日本はそれを他力で実現したにすぎず、中国は、自力での独自の民主化への道を模索中、となるわけです。日本の民主化の他律性の「ツケ」がいま、戦後がいつまでも終わらないというかたちで、回ってきているのに対し、韓国、台湾、中国は少なくとも自力で、民主化への道をたどって、ここまでできている。政治的にも、これらの国は、「横並び」だということがわかるのです。

こうした新しい状況を前に、これは東アジア世界

として、近代以降、有史以来、これまでになかったことだ、ということに、われわれは立ちどまって注目する必要があるのではないのでしょうか。

5 東アジア世界の新しい姿(2) ——東アジア圏の経済規模

しかも、ここにもう一つ各国の名目 GDP の世界におけるシェア率というものをあげることができます。

総務省の『世界の統計 2012』によれば、このシェア率は以下のようになっています。

日本 8.7%、中国 9.1%、韓国 1.6%、台湾 0.7%、香港 0.4%、つまり東アジア四カ国の合計で 20.5%。アメリカ 22.9%、EU 二七カ国総計で 25.7%という数と比べても、遜色のない数字であることがわかります。EU 主要国五カ国、イギリス 3.6%、フランス 4.1%、ドイツ 5.2%、イタリア 3.3%、スペイン 2.2%の合計が 18.4%ですから、優に EU 中核圏に匹敵する経済圏が、近年、東アジアに生まれているのです。

残念ながら、一九八〇年当時の数字は手に入らなかったでここにはありません。でも、こういう状況、つまり、東アジアの諸国が、同じ社会、経済、政治問題を共有し、横並びで関係しあい、しかもその地域としての経済規模が、アメリカ、EU に匹敵するまでに拡大し、確実に世界の平和と繁栄にとって一つの基礎的担い手に育ったという状況は、一九八〇年当時には存在していませんでした。近代以

降、非西欧圏ではじめて複数の国々が自律的に相互に支え合う形で枢要な経済圏を成立させた。東アジアの域内貿易は、域外に匹敵する半数を占めています。こういう非欧米圏での経済圏の成立は、未曾有のことなのです。

ここからわかることは、この状況の成立は、はっきりと、これらの国々が、協同して、平和で安定した地域世界を構築することを通じて、いまや世界の平和と繁栄に積極的に寄与していく段階に達しているということでしょう。

かつて、ヨーロッパ諸国は、戦後の荒廃の中から、ヨーロッパ統合ということをめざす動きをはじめ、八〇年代から九〇年代にかけての激動のなかで、敗戦国のドイツが過去の戦争責任を全うすることをつうじて主導権を発揮し、一九九二年に欧州統合(EU)にまでこぎつけたのでした。そういうことが、もし条件が許し、当事者が努力を傾注すれば、可能であれば、求められもする状況が生まれているということです。この東アジア世界でも、経済協力を基盤に、多様性と独立性と相互信頼に基礎をおく平和な協力圏の構築がはじめて目標に掲げられる条件が整ってきたのです。

われわれは、東アジアで何をなすべきか。その目標は、相互信頼に基づいた経済協力で結ばれた平和でかつ友好的な関係の構築です。そういうことが、当事者が今後努力を重ねれば、不可能ではないところまで来た、というのが、これらの数字がいま、私たちに教えていることでしょう。

たしかに、東アジア圏の現状をみれば、現実はその対極にある。戦後、これ以上ないくらいに激しい相互不信、相互対立、国境問題で紛糾しています。

しかも、こうした対立がこの数年で、急に起こってきた。国境問題は、日中間、日韓間を考えても、以前から存在していたものを、両国の政治家の知恵で、棚上げの形で「凍結」してきた。それが、この数年の間に「解凍」され、両国国民間のナショナリズム、憎悪の種にされるようになりました。

しかし、これらの対立激化は、それぞれの国家が、国民の不満ないし国内の緊急の問題により政府批判が強まるのを回避するために、これを隠れ蓑に使っているという側面が大です。最近の日本の特定秘密保護法の強行採決(二〇一三年一二月)が、欧米からの強い懸念が幾度も示されたにもかかわらず、中国政府、韓国政府からまったく批判を受けなかった

ことは特徴的でしょう。こういうところに、この側面での日本、中国、韓国政府の対市民、対国民への共同歩調が透けて見えます。

ですから、いま私たちの前にあるものは、産みの苦しみののです。この逆境のなかにも、希望の素地はしっかりとあるということを、去年の村上の発言とそれへの中国からの応答は、語っています。

6 村上春樹と中国

以上が、東アジア世界の勃興ということで、私が述べてみたかったことです。では、そのことと、村上の関係はどうなるのか。

ここで、村上春樹と東アジアの関係に、文学の方面から目を向けてみましょう。

すると、まず見えてくるのが、村上における中国の意味の重大さです。村上春樹の小説にはアメリカの影響が大きいとよくいわれるのですが、私の考えでは、思想的にみれば、そうではありません。彼の戦後性は、日本対アメリカという基軸をほとんどもっていません。彼はアメリカに文化的に親和性をもつことで、日本社会からの孤立を作りだすのに成功しました。その意味で、アメリカ文化、アメリカ社会の存在は、彼にとってきわめて重大なのですが、こと思想的領域にかぎっては、彼の中で重大な意味をもつのは、むしろ日本と中国の関係なのです。日本は中国に対していまなお、しっかりした侵略の責任をとっていない。彼の中国認識の基底にあるのがこの歴史認識問題です。このことは、日本とアメリカの関係に文学的基軸を置いてきた村上龍などとのきわだった違いです。

つまり、日本の戦後の問題を、中国との関係、あるいは東アジアとの関係で、考えてきた一人、日本の戦後の文学者のなかでも揺らぐことなくそのことを考え続けてきた最後の一人が、村上春樹なのだろうと思います

ここでは簡単にしかふれませんが、そのことを最もよく示しているのは、彼が一九八〇年に書いた最初の短編「中国行きのスロウ・ボート」と、二〇〇六年に書いた長編『アフターダーク』の呼応関係です。

「中国行きのスロウ・ボート」は一九八〇年四月に書かれた村上の最初の短編です。そこで彼は、自分がこれまでに会った三人の中国人について語るという話を書いています。なぜ村上の最初の短編

に、中国人との出会いの話が選ばれているのか。むしろ偶然ではありません。私の考えをいえば、ここで彼は、このとき、自分にとって一番気がかりなことを主題に作品を書こうとしています。そしてその結果、「主題」に選ばれているのが中国なのです。

それからさらに二十四年後、二〇〇四年に彼は『アフターダーク』という長編を書きますが、そこにはこの最初の短編の影が、色濃く落ちています。いくつかのディテールが、いわば「中国行きのスロウ・ポート」を本歌取り、引用となっているので、彼がこの長編を書くに際して、もう一度この「中国行きのスロウ・ポート」に立ち返り、そこから執筆をはじめていることは間違いがありません。中国という存在は彼にとってきわめて重大な関心の対象であり、それが彼の小説家としてのキャリアの起点から変わらないことであったことを、この二つの作品は私たちに教えているのです。

それはどこから来ているのか。すぐに考えられるのが、彼の父の世代が行った侵略戦争の舞台が中国を中心とした東アジアだったということです。僧侶でもあり高校の国語教師であった彼の父親はかつて兵士として中国大陸に渡った人間でした。その父の経験をつうじて、村上は、日本の中国侵略の歴史的な事実に関心、深い関心を抱かざるをえなくなったのだと考えられます。

村上は、中華料理がきらい、というか食べられないことでも名高いのですが、そのことも、このことと関係していると思います。ニューヨーカー誌に載ったイアン・ブルマとのやりとりでは、そのところは、村上が、ブルマに、父親が「京都大学」の「在学中に陸軍に入り、中国に渡った」こと、一度「ドキッとするような中国での経験を語ってくれた」こと、しかしその内容はいまでは自分の「記憶にない」こと、でも、「ともかくひどく悲しかったのを覚えている」ことなどがあげられています。そして、「ひょっとすると、それが原因でいまだに中華料理が食べられないのかも知れない」という村上の発言が記録されています。

そこには同じく、村上が「父親とは今では疎遠になっており、滅多に会うこともない」こと、「僕の中には彼の経験（父親の戦争の経験——引用者）が入り込んでいると思う。そういう遺伝があり得ると僕は信じている」と語ったこと、しかし翌日自ら電話をかけてきて「微妙な問題だから」「あのこと（父

親とのこと——引用者）は書きたてないでくれと言っ」てきたことなどが、述べられています。このイアン・ブルマの村上論は、取り上げないでほしいという依頼がなされたことが、その事実まで含めてすべて取り上げて書かれているという、奇妙な取材文なのですが、とにかくそういう得難い情報を伝えているわけです（「村上春樹——日本人になるということ」）。

二〇〇九年の二月、イスラエル賞受賞のためエルサレムを訪れた際、受賞演説の中で、村上は、前年亡くなった彼の父親にふれ、こう述べています。

わたしの父は昨年90歳で亡くなりました。元教師で、ときどき僧侶の仕事をしていました。父は大学院在籍中に徴兵され、中国へ送られました。戦後に生まれたわたしは子どもの頃、父が朝食前に毎日、家の仏壇の前で長く心をこめた祈りを捧げるのを見たものです。あるとき理由をたずねると、父は戦争で亡くなった人々のために祈っているのだと言いました。

味方でも敵でも、亡くなったすべての人のために祈っているんだよ、そう父は言いました。仏前に坐す父の背中を見つめていると、そこに死の影が漂っているように思われました。

父は死に、父の記憶も一緒に消えてしまいました。わたしが決して知りえない記憶です。しかし父につきまとっていた死の存在感は、わたしの記憶のなかにとどまっています。父から受け継いだ数少ない、そしてもっとも大切なもののひとつです。（「常に卵の側に」『クーリエ・ジャポン』二〇〇九年四月号）

ここで「父から受け継いだ数少ない、そしてもっとも大切なもののひとつ」と語られている「父につきまとっていた死の存在感」。それは、一言で言えば、日本における「中国」の意味ということです。

『アフターダーク』では、主人公の女性は中国語を学んでいます。彼女は他の同時代の日本の若者とおなじくアメリカ文化の深い影響のなかに育っているのですが、小説は、最後、彼女が、アメリカにではなく、北京に語学の勉強のために行くところで終わります。彼女はボストン・レッドソックスの野球帽を被り、しかし、中国に向かうのです。

いま新しく生まれようとしている東アジア世界の

問題を考えるばあい、求められるのは、こうした重層的な構えなのではないか、というのが、ここで一言いっておきたいことです。

7 「中国行きのスロウ・ボート」と 無謀な姿勢

村上が一九八〇年に書いた「中国行きのスロウ・ボート」についても、話しておきましょう。こういう話です。

三人の中国人との出会いが描かれていますが、その三つの例に則して言えば、ここにあるのは、まず、日本に長い間侵略行為を受け、その後、十分に謝罪されるといってもないまま、その日本と一定の「善隣外交」をもとうという中国の姿勢を前にした、そのことに引け目を感じつつも何とか未来に向け関係を築きたいという、書き手の思いであるといえるでしょう。

第一の挿話のなかで主人公の「僕」は、小学校のときに出会った足が悪い、杖をついた中国人小学校の教師について書きます。この中国人の先生は日本人の小学生に向かって、礼儀正しく、威儀をただして、「わたくしはこの小学校に勤める中国人の教師です」と挨拶し、中日両国は相手を尊敬しあわなければならない、と述べます。「僕」を含む日本人の小学生たちが押し黙っていると「わかりましたか?」と言い、「中国人の生徒たちはもっときちんとした返事をしますよ」と注意し、最後に、「いいですか、顔を上げて胸を張りなさい」、「そして誇りを持ちなさい」と諭すのです。

ここには日本国内で少数者の立場に置かれ、差別の対象ともされてきた在日中国人への——他の在日外国人をも含めた——日本人の一人としての痛みの感覚も、控え目に、ごくごく目立たない形のうちに、語られているでしょう。この中国人教師が足に障害をもつ人物に設定されているところにも、微妙な「力関係」の反映があると思います。

第二の挿話のなかで、主人公は、一九歳の時にバイトで知り合った中国人の女の子の話をします。彼女とデートした後、別れた際に誤って、山手線を逆方向に乗せてしまった。一巡して再びその駅に到着する彼女を待ち受けて、「僕」がそのことを謝ると、中国人の女の子が、「わざとやったのかと思ったわ」と答えます。「僕」はいたたまれなくなる。そして「いいのよ。そもそもここは私の居るべき場所

じゃないのよ」と言う彼女に、「ねえ、もう一度初めからやりなおしてみないか?」と提案し、ようやく明日会う約束を取りつける。でもそのあげくに「僕」は再び「過ち」を犯してしまう。彼女と会うことにした連絡先のマッチを直後、タバコを吸いがてら、誤って捨ててしまう。そしてその後、どんなに探しても、女の子とは会えない。「僕」の思いは届かない。原因はすべて自分から出たこと。話はここで終わります。

また、第三の挿話は、高校時代の級友だった在日中国人の友人に、君は「忘れたがっている」という告発を受けるというような話になっています。

でも、こういう日本人の中国人への後ろめたさというような話を、村上は、そういう話がまったく「受けない」、「人をシラケさせる」、古い感傷的な、ひどく知識人っぽい主題だとしか受けとられないような時期に、韜晦（ミスティフィケーション）を重ね、誰にも気づかれぬような形で、書くのです。それが、今日の経済圏の話に重ねていうと、一九八〇年ということの意味です。これが書かれたのは、日本では、数年前までの若者の反逆の時代が、不毛のままに終わり、シラケの時代に社会が覆われた時期でした。村上は、そういうとき、社会の風潮に乗じて、ではなく抗して、いわば時代遅れの主題として、自分は中国へのうしろめたさを心に抱えている、と述べたのでした。

この作品については、私は、『村上春樹の短編を英語で読む』という本でだいぶ詳しく扱っていますので、関心のある人は読んでみてください。今日はただ一つのことをいいます。

村上デビュー以来、時代に対し消極的な小説家といわれてきたが、むしろ逆なのではないか。ここには、村上の「無謀」ともいえる前傾した姿勢こそが現れているのではないかと。しかし、その現れ方が、全く違う方向を示していたのではないかと、というのが、それです。

明治期の思想家の中江兆民に、自由民権運動がもう完全に時代遅れだとみなされ、いまは帝国主義の時代だと語られた時期に述べた、自由民権は、メッセージとしては新鮮でないかもしれないが、実行としてはいまだ新鮮だという意味の言葉があります。彼はこういいました。「しかりこれ理論としては陳腐なるも、実行としては新鮮なり」（「考へざるべか

らず」明治三十三年十月)。

先日、大学の一年生と一緒にルソーの『エミール』を読むゼミで、私はこれがルソーから来ていることに気づきました。ルソーは、そこに、こう書いていたからです。自分のいう教育、「その原則はありふれたことだ、とひとはいうかもしれない。その通りだが、それを実地に適用するのはありふれたことではない。そしてここで問題になるのは実践だけなのだ」と(『エミール』上、今野一雄訳、岩波文庫、一三六頁)。

ここにあるのは、口に出してしまうと陳腐このうえないこと、正しいこと、当たり前のことをいうことは、そうでないことをいうよりも、ずっと難しいという問題です。そういうことをいうとき、人はどのような話し方、書き方をするものか。メッセージは、目新しくありません。だから、口に出しても陳腐でしかありません。この最初の短編で、彼は、そういう問題にぶつかっている。そして、自分なりに答えて、そういう陳腐な主題としての、戦後生まれの日本人としての、中国への消えない罪障感について語ろうとした。人はどんなふうに、陳腐なこと、でもいわずにいられないことを語るのか。小説とは、そういう難問に、答える別の仕方なのでしょう。そしてこの短編も、そこで同じ仕事をしているのです。

そこからの教訓を、簡単にいえば、その陳腐さを嘔みしめ、それでも自分の言葉で、語ろうとすれば、どんな言い古された陳腐なことも、もう一度、その姿勢を通じて、人に届くものとして語られる、ということでしょう。

ある意味では、村上の述べた「魂の行き来する道筋」というメッセージは陳腐です。また、これに対する閻連科さんの「ひとつの文学が冷遇される時国面積など何の意味があるのか」という返信も陳腐です。しかし、大事なことは、陳腐なことをいうことは、陳腐でないことをいうことよりも、ある場合にははるかに難しいということです。小説家は、だから、小説を書くのだ、とそうも言えるでしょう。陳腐なことをそうと知りながらなおもいおうとすることは決して陳腐なことではないのです。そしてそれが気むずかしい富豪フォッグ氏と如才ない召使い *passe-partout* の両者が「小説」のなかには棲んでいるということの、もう一つの意味にほかなりません。

そういう認識が、一つの困難な出発点になりうる

時代と場所に、われわれは生きているでしょう。

このあたりで、私の話を終えさせてもらおうと思います。

参考文献

- ジュール・ベルヌ『八十日間世界一周』上下、高野優訳、光文社、2009年
- イアン・ブルマ『イアン・ブルマの日本探訪——村上春樹からヒロシマまで』石井信平訳、阪急コミュニケーションズ、1998年
- ルソー『エミール』上、今野一雄訳、岩波文庫、1962年
- 閻連科「ひとつの文学が冷遇される時国面積など何の意味があるのか」(「中国の作家から村上春樹への返信」『アエラ』2012年10月15日号)
- 村上春樹「常に卵の側に」『クーリエ・ジャポン』2009年4月号
- 村上春樹「魂の行き来する道筋」朝日新聞、2012年9月28日
- 村上春樹『中国行きのスロウ・ボート』中公文庫、1983年
- 村上春樹『アフターダーク』講談社、2004年
- 坂田幹男『ベーシック アジア経済論』晃洋書房、2013年
- 加藤典洋『村上春樹の短編を英語で読む』講談社、2011年
- 加藤典洋「小説が時代に追い抜かれるとき——みたび、村上春樹『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』について」『シンフォニカ』Vol. 1、2013年 Autumn号